

守り、伝える

姿を現した当時の綱模様 修復後の姿をお披露目

平成28年度に善導寺小学校より移管された「小野川才助化粧まわし」の修復を、令和3年度に行いました。令和4年度に六ツ門図書館展示コーナーで開催した企画展「久留米歴史物語」で、修復後の姿を公開しました。

小野川才助（3代）は、山本郡高畑村（現善導寺町）出身で、幕末〜明治初期に活躍した久留米藩お抱え力士です。化粧まわし姿の錦絵が伝わり、その勇猛さを感じさせます。



化粧まわしの展示風景

《修復前の化粧まわし》

修復前は、昭和28年（1953）の筑後川大水害の被害による泥汚れのほか、全体的にほつれ、カビ、虫食いや裂け、特に金糸のほつれが激しく、このままでは、資料の劣化が進むことが懸念されていました。

《修復の内容》

①全体のクリーニング
表面や生地の間に入り込んだ埃等を刷毛や小筆などを用いて取り除きました。



クリーニング作業の様子

②全体の折れ皺緩和

湿した不織布を皺部分に当て、適度な重しを乗せてプレスしました。

③金糸刺繍部分の整形

金糸がほつれ、綱の形状を成していなかった箇所を中心に、意匠の復

元作業を行いました。

整形には、楮紙という和紙に、布海苔（布糊）を付けたものを用いました。いずれも古くから日本で使われてきた材料で、文化財の修復作業には欠かせません。修復の履歴をたどることができるよう、作業箇所はすべて記録に残しました。



金糸の修復作業の様子

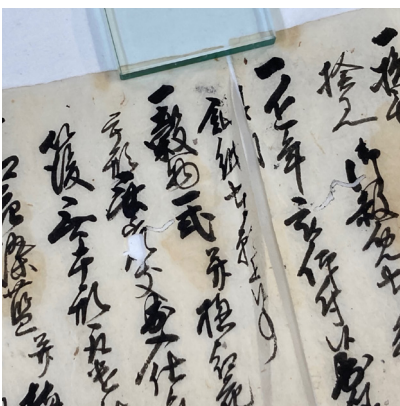
《修復を通しての発見》

クリーニングの結果、糸の損傷が激しかった覆輪部分にみられた黒い筋状のものは、汚れではなく、銀糸もしくは金属糸を使って施された模様であったことが新たにわかりました。

本来の姿に近づいた資料を、今後適切に保存し、公開・活用を進めていきます。

受け継ぎ、そして未来へ 紙の剥がれの応急処置

古文書の整理をしていると時折、紙の継目が剥がれているものがあります（左図参照）。そのまま収納せず「でんぶん糊」を水で溶き、筆を用い、糊付けします。スティック型の糊では紙への刺激が強すぎるためです。継目で文字が分かれていますこともあり、その際は文字がずれないように、特に慎重に貼り合わせなければいけません。その後、よく乾燥させ中性紙の封筒に収納します。本市所蔵の古文書は江戸時代のものが多くを占めています。当時の人々が紙を継ぎ、記した書状に「糊付け」という応急処置を施しながら、永久保存していくのです。



継目が剥がれた書状